

キリスト教的地球観と科学的地球観 ——地球はいかなる場所か

京都大学文学研究科
芦名定道

<内容>

- 1 問題
- 2 キリスト教と伝統的世界観
- 3 近代における地球観の変容とキリスト教思想
- 4 展望——新しい可能性を求めて

<ポイント・引用文>

1 問題

現代の宗教研究、とくにキリスト教思想研究の立場から問題へアプローチする

問題1. 世界の宗教は極めて多様であるが、洋の東西を問わず、近代化以前の宗教的な諸伝統においては、基本的に類似した地球観を見いだすことができる（宗教現象学の成果→神話論的地球観）。これをキリスト教に関して、確認する。

問題2. 近代の科学的地球観は何をもたらしたか。西洋キリスト教世界において、コペルニクス、ケプラー、ガリレオ、ニュートンら近代科学の英雄たちは、天動説から地動説へ、有限な世界から無限な宇宙への転換をもたらしたが、現代人が描く地球観・地球像は、こうした転換を経て形成された。

問題3. 近代的地球観が、キリスト教に何をもたらした（進化論の場合）、それに対して、キリスト教思想（神学）はいかなる対応を行ったのか。ここでは、ブルトマンの非神話論化（キリスト教信仰と神話論的地球観の分離）を紹介したい。

問題4. 宗教（キリスト教）は科学的地球観に対していかなる積極的な関係を構築しているのか。

2 キリスト教と伝統的世界観

1. 伝統的な諸宗教の多様性と共通性：三層構造の伝統的世界像

世界はその中心軸（聖なるものが顕現する世界の中心）によって貫かれた、天と地と地下の三層構造（神々—人間—死者）を成している。

2. 「キリスト教への招待」の講義ノート（京都大学オープンコースウェア）

<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/faculty-of-letters-jp%20/introduction-to-christian-studies>

3. 古代イスラエル宗教は現世中心的である。「天と地」の二層

「初めに、神は天地を創造された。」（創世記1章1節）

4. 「28:10 ヤコブはベエル・シェバを立ててハラムへ向かった。11 とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。12 すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。……16 ヤコブは眠りから覚めて言った。『まことに主がこの場所におら

れるのに、わたしは知らなかった。』17 そして、恐れおののいて言った。『ここは、なんと恐れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。』」（創世記 28 章）

5. 「使徒信条」（*Symbolum Apostolicum*、この言葉は 4 世紀には確認できる）。

わたしは、天地の造り主、全能の父である神を信じます。

わたしはそのひとり子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます。

主は聖霊によってやどり、おとめマリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、よみにくだり、三日目に死人のうちからよみがえり、天にのぼられました。そして全能の父である神の右に座しておられます。そこからこられて、生きている者と死んでいる者とをさばかれます。

わたしは聖霊を信じます。

きよい公同の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、永遠のいのちを信じます。

3 近代における世界観の変容とキリスト教思想

6. 近代の科学的世界観（地球観）の登場→諸宗教が前提としてきた世界観の変更

有限から無限へ、平面から球体へ、そして中心喪失

7. 近代科学的地球観の意味での「地球」

中心が存在しない無限宇宙の片隅で、自ら自転を行いつつ太陽の周りを公転する地球

8. 「人間の盲目ぶりと惨めさを見、沈黙の大宇宙をながめ、人間がなんの光もなく、ただひとり放り出され、この宇宙の片隅に迷いこんだように、だれが自分をここへ置いたのか、自分は何をして来たのか、死んだらどうなるのかもわからず、何を知ることも不可能なさまを見つめると、わたしはぞうっとしてくる。」（パスカル『パンセ』693、田辺保訳、角川文庫）

9. ニュートン力学に結実した近代の科学的知（17 世紀の科学革命）+地理上の発見と大航海時代 → 球体としての地上（つまり地球）という西欧的近代の世界観の普及 → 地球上に生きる多くの人類に共通の日常的リアリティとして定着

10. 進化論：人間とほかの生命体との連続性（＝進化のプロセス）＝近代的世界観による脱中心化の完成体

11. 「宗教と科学」の関係を対立図式で捉える問題と進化論との関わり

12. キリスト教信仰と近代科学の内的連関（マートン・テーゼ）

13. ガリレオ裁判は宗教と科学の対立の事例として適当か？

14. コペルニクスの地動説は聖書と矛盾しない。コペルニクスの弟子レティクスによる地動説の擁護論（16 世紀前半の執筆と推定）

「天体现象の首尾一貫した説明を得るために地球の運動が仮定されるべきであることは、数学的にいって確かである。しかし、この問題にかんし、聖書にしたがえばなにが主張されるべきであろうか？」（レティクス「[聖書と]地球の運動にかんする作者不明の論考」、R.ホーイカース著『最初のコペルニクス体系擁護論』高橋憲一訳、すぐ書房、1995 年、56 頁）

「聖書が一般に受け入れられている語り口をつかっているのは周知のことであって、い

まさら証明する必要はない。したがって明らかに、聖書からひき出された太陽の運動にかんする幾多の記述をわれわれはどれほど主張しようと、聖アウグスティヌスによって定められた限界をけっして踏み超えることなく、また、なにか不都合な帰結が出てしまうようなことを導入することなく、これらは太陽の見掛けの運動のことをいっていると理解すべきである。したがって、われわれを反論しているように思われる、太陽の運動にかんする聖書のあのテキストは、天文学の最近の再興で最良の検証を受けた諸結果と、矛盾していることにはならないであろう。」（同書、133頁）

15. 芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年。

フランシスコ・J・アヤラ『キリスト教は進化論と共存できるか？』

教文館、2008年。

cf. リチャード・ドーキンス『神は妄想である』早川書房、2007年。

16. 19世紀末以来、宗教と科学の対立図式が、広く一般化。

17. 20世紀のキリスト教思想を代表する神学者たち（特にプロテスタントの伝統的教派の神学を代表する思想家たち）における「分離論」

18. ブルトマンの非神話論化(Entmythologisierung)

キリスト教信仰の内実は、古代的であろうと近代的であろうと神話論という形式から分離して表現できるのであり（信仰とは本来世界像に制約されない）、もし、キリスト教信仰が近代科学の世界観・地球観との対立を原理的に回避しようとするならばこの分離を遂行すべきである。

19. キリスト教信仰と近代的知との軋轢の歴史（啓蒙思想とリンクした実証主義的科学→様々なタイプの無神論）

→キリスト教信仰の近代化・倫理化：近代的市民に相応しい人間の生き方を聖書に求めるという議論、聖書の神の国という表象を近代社会の進歩の延長上にイメージしようという試み、宗教は人間の内面性の問題であるとの宗教理解。

20. オランダ・プロテスタント教会（PKN）のクラアス・ヘンドリックセ牧師

「神は、私にとって、存在ではなく、人々の間で起こり得ることのための言葉である。例えば、誰かがあなたに『私はあなたを見捨てない』と言い、そしてその言葉が実現する。その“関係”を神と呼ぶことに全く問題はない。」

(<http://www.christiantoday.co.jp/main/international-news-1998.html>)

4 展望——新しい可能性を求めて

21. 宗教と現代科学との関係性の新しい可能性。人類が共有する危機意識の存在。環境危機。→ 宗教者も科学者も、対立や分離では対処できない。

22. 日常性を共有しそれとの関係において緩やかにつながった宗教と科学。

cf. 日常性から遊離するだけの宗教は、日常性の歪みを批判することも、日常的リアリティの批判的構築に寄与することもできない。

23. 日常性、科学、宗教の三者の結びつきを可能にする世界観・地球観

→ 宗教と科学の相補的な関係

説明と解決手段／環境的感性和動機付け